

研究ノート

外国人留学生を対象とした入学前教育の検討と教材開発

下岡 邦子

キーワード：入学前教育、高大連携、学びの関連性、主体的な学び、作文教材

1. 入学前教育に求められる三要素

本稿は、外国人留学生を対象とした入学前教育としてどのような教材が有効であるかを考察するものである。それにあたり、まずは、高大接続改革期における入学前教育導入の背景を確認し、入学前教育に求められる重要な要素は何か考察したい。

2014年に中央教育審議会による答申が示されて以降、高大接続改革、特に「入試改革」が進められてきた。そしてその結果、現在の大学には様々な入試形態を経て入学した学生が在籍している。このような「入試改革」によって、大学は多様な学生の受け入れが実現したといえるが、その一方で、「学生間の学力差の拡大」という新たな課題に直面している。特に、早期に大学への入学が決定した学生（以下「早期合格者」という。）の低学力化が指摘され、大学はその対策に乗り出している。入学前教育は、その対策の一つとして、現在では多くの大学で実施されている。

では、入学前教育をより良いものにするためには、どのような要素が必要なのだろうか。文部科学省は入学前教育の充実を図るための方策として、次の三点を挙げている^[注1]。

- (1) 特に12月以前の入学手続き者に対しては、入学前教育を「積極的に講ずる」こと
- (2) 各高等学校においても、大学と連携し学習意欲を維持するための必要な指導を行うよう努めること
- (3) 学校推薦型選抜の場合、合格決定後も、高等学校の指導の下に、高大連携した取組を行うことが望ましい^[注2]

ここで注目すべきは「高等学校と大学の連携」に言及している点である。つまり、理想とされる入学前教育は、大学が単独で実施するものではなく、何らかの形で、大学と高等学校とが連携しながら実施するものであるということだ。

さらに、入学前教育の質的な検討も進んでいる。及川・石田（2019）は、「高大接続改革期における入学前教育の力点をシフトさせる観点」として、次の四点を挙げている^[注3]。

- ① 高等学校の新しい学習方法とかけ離れていないこと
- ② 高等学校の学びと大学・短期大学の学びの関連性を示し、学習への意欲を高めること
- ③ 成果物やフィードバックなどを通して、充実感が得られ、主体的に取り組める内容であること

- ④ 入学後に学ぶ学問への興味を醸成させ、入学後も意欲的に学習する準備となる内容であること

これら四つの観点のうち、①と②では「高等学校との関連性」に言及しており、ここでもまた、入学前教育における高大連携の重要性を示唆している。また、②と④では「学生の意欲の維持・向上」について言及している。ここで及川・石田（2019）は、「意欲」には「『学習』に対する意欲」と「『（入学後に学ぶ）学問』に対する意欲」の二つの意味が含まれるとする。そして、この二つの「意欲」のうち、②が「『学習』に対する意欲」、④が「『（入学後に学ぶ）学問』に対する意欲」のことであると考えられるが、注目すべきは、この②と④でも「学びの関連性」に言及していることである。このことは、「学生の意欲の維持・向上」を実現するためには、早期合格者に提供される入学前教育教材は「高等学校で学んだことを復習し、学力を補強する」という内容に加え、「大学で実際に行われる学びとの関連性が読み取れる」内容のものでなければならないということを示唆している。

さらに、及川・石田（2019）は③で「学生の主体的な学び」について言及しているが、これは裏を返せば、入学前教育が対象者（早期合格者）にとって「受動的に取り組むもの」になりがちであることを示しているともいえる。特に、大学が早期合格者へ教材を送付し、課題の提出を課す「通信教育型入学前教育」の場合は、対象者に入学前教育の意図が伝わりにくく、対象者に「やらされている」という意識が生じやすい。そして、対象者が「やらされている」と受動的な姿勢で取り組んでしまえば、たとえ充実した内容の入学前教育教材が提供されたとしても、良い結果は生まれにくいといえるだろう。したがって、入学前教育の教材を検討する際は、対象者が「この教材は自分にとって有用なものである」と感じられるかということが重要になってくる。そして、そのような意識が生じることによって、対象者が主体的な学びを得られるのだと考える。

以上のことを踏まえ、本稿では、入学前教育に求められる重要な点として次の三つの要素を提示したい。一つは「高大連携」、一つは「学びの関連性」、そしてもう一つは「主体的な学び」である。入学前教育を、大学入学前の「空白期間」を単に埋めるためだけの施策ではなく、大学入学後を見据えた「円滑な高大接続」のための施策であると考えれば、この三要素を入学前教育に何らかの形で取り入れることが望ましいと考える。

さらにいえば、この三要素は、日本人学生を対象とした入学前教育だけでなく、外国人留学生を対象とした入学前教育にとっても重要なものである。つまり、入学前教育の対象者が外国人留学生の場合も、やはり「円滑な高大接続」を目的とした入学前教育は必要不可欠であり、それを達成するためには、「高大連携」「学びの関連性」「主体的な学び」という三要素は欠かせないということだ。しかしその一方で、対象者が外国人留学生であることで、入学前教育の実施内容や方法について、多少の変更・工夫が必要であることも事実である。次章では、その点について詳しく述べたい。

2. 外国人留学生に対する入学前教育の留意点

充実した入学前教育を実施するためには、「高大連携」「学びの関連性」「主体的な学び」という三要素が重要であることは、対象者が日本人学生であっても外国人留学生であっても変わらない。だがその一方で、対象者が外国人留学生である場合、いくつか留意すべき点がある。本稿ではその留意点として、「対象者の多様さ」「日本語教育機関の多彩さ」「対象者の入学前教育に対する認識の低さ」という三つを取り上げる。

2.1. 対象者の多様さ

対象者が外国人留学生の場合、まず留意すべきこととして彼らの多様さが挙げられる。その一つが日本語学習歴である。外国人留学生の場合、大学入学までの日本語学習歴は一人一人異なる。例えば、入学者の中には、日本に来日する前から日本語を学び、さらに日本語学校での日本語教育を受けた外国人留学生がいる一方で、来日前の日本語学習歴は全くなく、日本語学校に在籍したのも1年間のみという外国人留学生もいる。また、日本語学校に2年間に在籍した場合でも、コロナ禍の影響から、その多くの時間をオンライン授業という形態で学んだという外国人留学生もいる。このように、外国人留学生は、日本語を学んだ年数はもちろん、日本語をどこで学んだのか、さらには、どのような形態で学んだのかなど、あらゆる面において日本語学習歴が異なる。

また、外国人留学生は、一人一人の学生が有する特性も多様である。例えば、外国人留学生は、それぞれが異なる母語を話し、漢字の使用にも違いがある。また、母語の他にも、それぞれが背景として持つ文化や歴史にも多様性が見られ、大学入学時の年齢や経歴も様々である。

しかしながら、対象者がどれほど多様であっても、実施する入学前教育の内容は原則一つである^[註4]。したがって、入学前教育を検討する際、対象者である外国人留学生の多様さに留意し、どのような特性を持った学生であっても適切に取り組めるような内容の教材を開発する必要がある。

2.2. 日本語教育機関の多彩さ

二つ目の留意点は「日本語教育機関の多彩さ」である。先述したとおり、充実した入学前教育にとって「高大連携」という観点は重要であり、そのことは対象者が外国人留学生の場合も同様である。ただし、対象者が外国人留学生の場合、「高大連携」の「高」の部分は日本語学校などの日本語教育機関を指すことになる。日本の大学への進学を目指す外国人留学生の多くが、日本国内にある日本語教育機関に在籍し、そこで日本語を学びながら大学進学の準備を進めるからだ。だが、日本国内にある日本語教育機関は個々の独自色が強く、実に多彩である。日本国内の日本語教育機関のカリキュラムは、多くの場合、現場の教師の裁量および創意工夫によって構成される。その点において、文部科学省の指導を受ける高等学校

とは大きな違いがある。このような独自色の強い個々の日本語教育機関とどのように連携して入学前教育を進めていくかということも、留意すべき点であろう。

2.3. 対象者の入学前教育に対する認識の低さ

さらに、「入学前教育に対する認識の低さ」という点も、対象者が外国人留学生の場合は留意しなければならない。高大接続改革が進むにつれて、日本人学生を対象とした入学前教育は広く浸透し、対象者である早期合格者も、彼らが在籍する高等学校側も、「入学前教育というものがある」という認識が共有されつつあるといえる。だが、外国人留学生の場合は、そのような共通認識はまだ確立していない。なぜなら、外国人留学生に特化した入学前教育そのものが、まだほとんど広がりを見せていないからだ。したがって、多くの外国人留学生が、入学前教育というものを理解しないまま入学前教育に取り組む、という状態になってしまう。

このような現状を踏まえ、対象となる外国人留学生、さらには、彼らが在籍する日本語教育機関に対して、「なぜ入学前教育を実施するのか」という目的を明確に示し、それを丁寧に説明する必要がある。

入学前教育の目的は、「高大接続」と「学生把握」の二つに大別され、さらに「高大接続」は、「入学予定者の学習意欲の維持 (a)」と「入学予定者の学力の補強 (b)」の二つに分けることができる^[注5]。そして、この (a) (b) の目的を達成するためには、入学前教育の対象者がいかに主体的に課題に取り組んだかということが重要になってくるが、そのような「主体的な学び」を実現するためには、対象者が入学前教育の目的を正確に理解することが必須であるといえる。

ただし、「通信教育型入学前教育」の場合、入学前教育の目的の説明は書面によって示されることがほとんどである。このとき、対象者が外国人留学生の場合は、「入学前教育というものを知らない」ということも影響し、書面で示された入学前教育の目的が正確に伝わらない可能性があると考えられる。したがって、外国人留学生へ書面で入学前教育の目的を示す場合は、特に平易な日本語でわかりやすく記す必要がある。

さらに、より正確な理解を得るため、日本語教育機関からの働きかけも重要になってくる。つまり、大学が実施する入学前教育について、事前に日本語教育機関にも書面等を通じて案内し、対象者への対応を依頼しておくのだ。そうすることで、仮に対象者が入学前教育の目的を理解できなかった場合も、自分が在籍する日本語教育機関の先生の助けを得て、その意義が理解できる可能性が高くなる。

このように、外国人留学生を対象とした入学前教育の場合には、特に留意すべき点がいくつか挙げられる。そして、開発される入学前教育教材も、これらの留意点を踏まえた内容となることが望ましいといえる。

3. GC 学部日本語コースの入学前教育教材について

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コース（以下、「GC 学部日本語コース」という。）では、入学前教育として、2021 年から株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」を採択し、実施してきた。ここでは、2021 年から実施してきた業者委託による入学前教育教材から見えてきた課題を取り上げ、それらの知見が新たな教材の開発にどのように活かせるのかを検討したい。

3.1. 業者委託による入学前教育教材から見えてきた課題

GC 学部日本語コースでは、株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」の中から、「表現力基礎」という教材を選定し、早期合格者に課してきた^[注6]。この教材には4回の小論文課題があり、「対象者による課題の作成・提出」と「添削者による課題の添削・返却」というやり取りが行われる。本稿では、この4回の小論文課題から見えてきた課題を以下に示していく。

1) 課題作成の指示内容や添削者のコメントに対する理解力の不足

まず、一つ目の課題として、対象となる外国人留学生が課題作成の指示内容を正確に理解できないという点が挙げられる。株式会社ナガセが提供する「入学前準備教育」は、対象者は日本人学生であることを前提として構成されている。したがって、課題作成の指示内容も、日本人学生が理解できることが基本となっている。この場合も、N3 程度の日本語能力を持った外国人留学生であれば、何の問題もなく理解できるだろう。しかし、N3 程度の日本語能力に達していない外国人留学生や、あるいは、ある程度の日本語能力はあっても極端に漢字表記を苦手とする非漢字圏出身の外国人留学生では、課題作成の指示内容を正確に理解することは難しいといえる。さらに、日本語能力が一定の水準に達していない外国人留学生にとっては、添削者のコメントや指摘を理解することにも困難が生じると予想される。このような場合、添削者がどれほど適切かつ有効なアドバイスを記して課題を返却したとしても、それが次の小論文課題で全く活かされていないといったケースも発生する^[注7]。

2) 日本語教育機関との連携の難しさ

対象となる外国人留学生が課題作成の指示内容や添削者のコメントを正確に理解できない場合、その外国人留学生が在籍する日本語教育機関の先生にサポートを依頼し、対象者の理解を促す、という方法が考えられる。毎日接している日本語学校の先生からの補足説明があれば、日本語能力に課題を抱える外国人留学生であっても正確に指示内容を理解することができるだろう。しかし、業者委託による入学前教育の場合、その多くが業者と対象者との間でのやり取りに終始している。もちろん、業者委託による入学前教育であっても、日本語教育機関などの「高」の部分の部分を介在させることは可能だ。だが、現実問題として、それは業務

の煩雑化を伴い、実現するのは困難であるといえる。

3) 「学びの関連性」の見えにくさ

業者委託による入学前教育の場合、教材内容は高等学校での学びを踏まえたものとなっている。それは、主な対象者を日本人学生としているからだ。さらに、「表現力基礎」で課される小論文課題のテーマを見てみると、「自分の好きな動作」や「学ぶとは何か」のような、どのような対象者であっても興味を持って取り組めるような汎用性の高い内容となっている。しかし、そのような汎用性の高い内容は、「高大連携」、つまり「高等学校での学びと大学での学びの関連性を示す」という観点に立って考えると、やや効果が弱いものになってしまう。

また、個々の独自色が強い日本語教育機関で学んできた外国人留学生にとっては、そもそも「高等学校での学びを踏まえた教材」を提示されても、それまでの日本語教育機関で学んできたこととの関連性が見いだせないという事態も想定される。そして、学びの関連性が見いだせない入学前教育の場合、対象者の主体的な学びも生じにくいと考えられる。

3.2. 新たな教材の開発

以上のように、業者委託による入学前教育教材には、その有効性が認められる一方で、対象者が外国人留学生の場合では、彼らが持つ多様性や特性からうまく機能しない点があることが確認できた。それでは、外国人留学生を対象とした入学前教育としてどのような教材が有効なのだろうか。

GC 学部日本語コースでは、2021 年から実施してきた業者委託による入学前教育教材から得た知見を活かし、現在、コース独自の入学前教育教材（作文教材）を開発している。開発教材として「作文」を選択した狙いは、2021 年から実施してきた業者委託による入学前教育教材（小論文課題）との継続性を確保することにある。先述のとおり、入学前教育の目的の一つに「学生把握」があるが、これは各年度の入学者の傾向を把握するだけでなく、3 年、5 年、10 年と、同コースの入学者の傾向がどのように変化しているか（もしくは変化していないか）を把握することも含まれる。したがって、実施される入学前教育の内容は、一定の共通性を維持したものであることが求められる。このことから、GC 学部日本語コースでは、これまで実施してきた入学前教育との共通性を維持し、「学生把握」の継続性を確保するという観点から、作文教材を開発することとした。

また、入学前教育の対象者も、これまでと同様に、早期合格者とした。この点についても、2021 年から実施してきた入学前教育との継続性を確保することがその理由である。

では次に、今回の入学前教育教材で重視している点として、以下に三点示す。

1) 日本語教育機関との連携

一つ目は、日本語教育機関との連携である。GC 学部日本語コースの入学前教育では、教材や返却課題の送付先をすべて日本語教育機関とし、日本語教育機関の先生から対象者（早期合格者）へ入学前教育教材や返却物を手渡ししてもらう、という流れを検討している。この場合、「GC 学部日本語コース→日本語教育機関→対象者（早期合格者）」という流れを確保するために重要となってくるのが、送付先となる日本語教育機関（あるいは、対象者の担任の先生）の入学前教育に対する理解である。したがって、入学前教育を実施するにあたり、入学前教育教材に添付する形で日本語教育機関へ案内文書も送付し、GC 学部日本語コースが実施する入学前教育の実施意図や目的を示すこととする。さらに、案内文書に入学前教育に関する問い合わせ先を明示し、日本語教育機関が入学前教育に関する不明点を速やかに解決できるようにする。

2) 「学びの関連性」の確保

二つ目は、学びの関連性、つまり、日本語教育機関での学びと大学での学びの関連性を示すことである。特に、「大学入学後にどのような学びがあるのか」ということを対象者が想像できる内容を検討している。具体的には、今回の作文教材は日本語コースの必修科目である「日本語基礎演習Ⅰ」（1 年次前期開講）での「母校の先生への近況報告」という活動につながるよう設定している。また、対象者には日本語コースで制作している「日本語コースパンフレット」を教材とともに送付し、そこで紹介されている学修内容を踏まえた作文テーマも示すようにする。このように、これまで日本語教育機関で繰り返し取り組み習得した「作文技能」を活かしながら、大学入学後の GC 学部日本語コースでの学びを想定するという作文教材を提示し、対象者が学びの関連性を認識できるようにする。

3) 「主体的な学び」の確保

そして、今回の入学前教育教材では、対象となる外国人留学生の主体的な学びの確保も重視している。そのために、①入学前教育の目的の明示化、②評価基準の明確化、③フィードバックの徹底をはかる。

まず、入学前教育の目的は、次のような文言で明示する。

1. 神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コースの先生と作文の提出・返却を通じてコミュニケーションを取り、自分のことをよく知ってもらう。
2. 神戸学院大学での学習や生活について想像したり考えたりして、入学後の不安や心配事を少なくする。
3. 日本語で文章を書く練習をして、入学した後の勉強がスムーズに始められるようにする。

ここで重要なのは、「なぜ課題（作文）に取り組むのか」という点を平易な日本語で明確に

示し、それを対象者（早期合格者）の入学前教育に対する理解の促進につなげることだ。また、仮に理解が不十分であった場合も、今回の入学前教育教材は日本語教育機関の先生から対象者へ手渡しで提供されるので、日本語教育機関の先生から対象者への何らかの補足説明があることが期待できる。

次に、評価基準の明確化については、いくつかの評価項目を立て、それらの評価項目に「できた」「あと少し」「できなかった」という三つの観点で評価を示すという形を検討している。また、評価項目は表記、文体、構成、内容に分け、それぞれについて具体的な評価ポイント（例：漢字を適切に使用している）を示すようにする。そして、対象者への指示として、「すべての項目で「できた」となるのが良い」ということも併せて明示する。そうすることで、対象者は「何ができればいいのか」ということを明確に認識することができ、それらの目標を達成するために意欲的に課題（作文）に取り組むことが期待される。

そして、対象者が課題（作文）を提出した後は、日本語コースの教員がそれを添削し、日本語教育機関に返却する（入学前教育教材と同様に、返却物も日本語教育機関から対象者へ手渡しするという流れを踏む）。作文添削は、対象者に事前に示した評価基準に沿って行い、添削者のコメントも記すようにする。そうすることで、対象者は課題（作文）を通して、大学入学後に接することになる日本語コースの教員とコミュニケーションをとることになる。そのようなやり取りを通じて、早期合格者の大学入学後の学びに対する意欲の維持に努める。

4. 今後の取り組み

以上のように、GC 学部日本語コースでは、これまで得た知見を活かして、独自の入学前教育教材を開発している。この入学前教育教材を完成させ実施した場合、次に重要となってくるのが、入学前教育から得られた情報の分析と共有である。

入学前教育は、対象となる早期合格者が大学入学前の一定期間を有効に活用し、より円滑に大学での学びをスタートさせるためのものであるが、その一方で、大学の教職員が、新たな入学者の傾向や課題をいち早く把握し、その情報を授業内容や指導方法に反映させるためのものでもある。したがって、入学前教育の実施後は、そこから得られた情報を速やかに分析し、その分析結果を教職員間で共有することが重要となってくる。

また、入学前教育の対象者からのフィードバックも必要だ。入学前教育に対する対象者自身の「自己評価」を得ることで、彼らの取り組む姿勢や学修への意識が見えてくる。したがって、何らかの形で、入学前教育の対象者が自己評価できる仕組み（例えば、アンケートの実施など）を検討したい。

高大接続改革期において、日本人学生への入学前教育が浸透する一方、外国人留学生を対象とした入学前教育はまだ発展の途上にある。現在、GC 学部日本語コースで検討を進めている入学前教育教材がその一つの道筋となることを期待する。

〔注〕

1. 文部科学省「「高大接続改革」に係る質問と回答（FAQ）3-5-1 入学前教育の充実を図るために、どのような方策がとられるのでしょうか」参照。
2. 文部科学省は（3）の一例として、「入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況等を高等学校を通じ大学に報告させる」ことを示している。
3. 及川・石田（2019）p.69 参照。
4. 入学前教育の目的の一つに「学生把握」があるが、この目的を適切に実行するためには、対象者全員に同一の教材を課し、その結果から個々の学生の特性や入学者全体の傾向を把握するという方法が最も有効であるといえる。
5. 下岡（2022）p.82 参照。
6. 「表現力基礎」の詳細については、下岡（2023）を参照されたい。
7. 下岡（2023）でも指摘したとおり、GC 学部日本語コースの入学予定者に見られる一つの傾向として、「容易に修正できそうなことも修正しない（あるいは、修正できない）」というものがある。これに関しては、もちろん、「入学予定者自身の注意力の欠如によるもの」という可能性が考えられるが、その一方で、そもそも「入学予定者が添削者の指摘内容やその意図を十分に理解できていない」という可能性も考えられる。

〔参考文献〕

- 及川愛・石田あすみこ（2019）「入学前教育の力点はシフトしている～入学前教育を充実させる観点の整理～」『大学時報』No.384、pp.66-73.
- 下岡邦子（2022）「外国人留学生に対する入学前教育の意義と課題」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第7号、pp.81-91.
- 下岡邦子（2023）「大学入学前における外国人留学生の日本語表現力の傾向と課題－学部で早期合格した外国人留学生への入学前教育の結果を手掛かりとして－」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第8号、pp.127-137.
- 文部科学省「「高大接続改革」に係る質問と回答（FAQ）3-5-1 入学前教育の充実を図るために、どのような方策がとられるのでしょうか」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1402211.htm（2023年9月18日閲覧）
- 文部科学省中央教育審議会（2014）「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために（答申）」